転生王女と天才令嬢の魔法革命

鴉ぴえろ

ファンタジア文庫

2929

口絵・本文イラスト　きさらぎゆり

オープニング

これより語られるのは、ある王国の王女様のお話。
魔法に憧れた王女様が、前世の記憶を取り戻した事から始まる物語。
時に人を振り回し、時に人を魅せて、魔法の魅力と真理を追い続ける。
これは、そんな物語の始まり。

＊　＊　＊

ただ〝魔法〟という言葉が好きだった。誰かを幸せに、笑顔に出来るから。魔法という存在そのものを愛していた。永遠に届かない、実現しないからこそ。もしも願って叶うなら、きっと私は魔法使いになりたかったんだと思う。
ふと、ひょんな事からそんな〝前世の記憶〟の事を思い出した。
私の名前はアニスフィア・ウィン・パレッティア。パレッティア王国の第一王女。御年五歳、ぼんやりと空を見上げていた時の事だった。

魔法があるなら空を飛べるのに。何故かそんな事を思った、まさにその時だった。

そう思ったのは、はて、どうしてだろうか？　疑問を思い起こした時、私の記憶は忘れていたものを思い出すように前世を取り戻した。

パズルのピースが嵌まっていくような感覚。まるで自分という存在に欠けていたものを見つけたように。この日をもって、私は人生の転機を迎える事になった。

蘇った前世の記憶は摩訶不思議と言わざるを得なかった。空を行く飛行機、アスファルトを敷き詰められた道路、その道路を走る自動車を始めとして、次々と脳裏に過る前世では当たり前にあった文明の産物。

それは私にとって未知でしかない。私が今生きている世界には飛行機もなければ自動車もない。空を飛ぶのは鳥や魔物であって、道路だってアスファルトではないし、走るのは自動車じゃなくて馬車だ。貴族なんてお話の中の存在でしかなかったけど、私は王族のお姫様。そうして私は浮かび上がった記憶を思い返して息を吐いた。

「……困ったわ」

口にしてしまう程に困ってしまった。だって前世の記憶が蘇ってからの私の思考や価値観は〝アニスフィア〟として育ったものよりも、前世の影響が色濃くなってしまったから。王族としての責務だとか、貴族としての誇りとか。知識としてはある。

でも、共感が薄くなってしまった。だって前世だったら貴族がいなくても世界は回っていたのに。そう考えてしまうと違和感が酷くて、王族として育てられた自分と噛み合わない。おかしいのは自分だとわかってる。けど、そう考える自分こそが自分にとって正しい形なので曲げたくない。こうなると前世の記憶が蘇った所で何も良くない。

「まぁ、良いや！」

私は深く悩む事は止めた。なにせまだ自分は五歳。価値観は時と場合だったり、あとは経験で変わるだろう。多分、なんとかなる。私はこの時、とても楽観的だったと後で振り返って思うだろう。そんな楽観的な私はこれから迫り来る問題より、今にも手が届きそうな望みを叶える事の方に意識が向いた。

「そう、だってこの世界は〝魔法〟がある！」

この世界において魔法は御伽話の術や空想の類じゃなくて、現実に存在するものなのだ。火を操る者、水を操る者、風を操る者、土を操る者。理屈も理論も知らない。それでも記憶に確かに残るその光景は、私の心を掴んで離さなかった。

魔法が使えれば空も飛べるかも知れない。そんな魔法があったのなら。思えばもう止まらない。想像が膨らんで、胸が高鳴る。

「善は急げだね」

　私は拳を握りしめながら決意を新たにして、勢い良く部屋を飛び出した。勢いのままに王城の廊下を駆け抜けていくと、曲がり角を曲がった所でメイドのお姉さん達と擦れ違う。私は軽く会釈して、そのまま横をすり抜けて行こうとする。

「ひ、姫様!?　廊下を走ってはいけません!?」

　後ろから抱きかかえられるようにして引き留められてしまった。私はあっさりとメイドの腕の中に収まってしまい、足をジタバタさせてみる。けれど所詮は子供の力だ。

　メイドが離すまいと力を込めれば流石に逃げられない。観念して力を抜く。振り返ってみれば知り合いのメイドだと気付いた。

「あら、イリア。ごめんなさい、ちょっと急いでるの」

「だからといって、お城を走り回るだなんてはしたないです」

「うう、いけず……」

　脱出は無理そうなので早々に諦めた。私の抵抗がなくなったのを見て、イリアは下ろしてくれる。そのまましゃがむようにして目線を合わせて来る。

「いきなりどうしたのですか、姫様」

「父上に直訴するの！」

「じ、直訴……？」

「魔法を学びたいと直訴するの！」

「……はぁ、魔法をですか」

　ふんぞり返って言う私にイリアは、なんでまた、と言いたげな困惑した表情になる。

「イリア、私は魔法を使いたいの」

「意欲がある事は良い事でございます。しかし、何故また唐突に魔法を学びたいと？」

「空を飛びたいと思ったの！」

「はい？」

「空を飛ぶの！」

「魔法でですか」

「飛ぶのです！」

　イリアに何を言ってるんだろう、という顔をされてしまう。それもそうだと思う。魔法で空を飛びたいなどと、私が知る限りは前例がない事だから。

「それはやりたいことの一つで、魔法を使えるなら良いのです。魔法を使って悪い奴等をこらしめたり、民の為に魔法を使えるようになりたいのです」

「それはそれは。立派な夢でございますわね。しかし、陛下もご多忙の身であらせられます。私からお伝えいたします故、お部屋にお戻りになって頂けますね？」

「むぅ、仕方ないわね。ここはイリアに免じて直訴は止める！」
「ありがとうございます、姫様」
面倒な事にならなくて良かった、と胸を撫で下ろすイリア。その胸は豊満だった。顔もよく見れば整った美人さんだ。目を惹く美人さんなのは王城に仕えるメイドさんだからなのかな？
さて、部屋に連れ戻された私に出来る事はない。アニスフィアとしての記憶を浚ってみても、今日の習い事は終わってしまっている。それならば、と自分の部屋を漁ってみる事にした。それだけでもう期待に胸が高鳴った。
後の転換を振り返るのならば、この時こそが私、アニスフィアの始まりとも言えた。
私はなります！　憧れの魔法使いに！

＊　＊　＊

そうして、少女の目覚めより時は流れた。
パレッティア王国。それは魔法によって発展した大国である。そんなパレッティア王国には国が運営している貴族や王族が通う学院が存在する。その名もパレッティア国立貴族学院。他国からの留学生も招き、学院という小さな社会を形成した社交界の縮図である。

勿論、学び舎としての意味もある。だが、幾ら身分の差を気にせず、成績を高める事で研鑽を促す目論見があっても貴族は貴族で、王族は王族なのだ。
身分が高い者には人が集まり、身分が低い者はそんな身分が高い者に取り入らなければそもそも学院内での地位や居場所を失うなどよくある事。
かといって親が子供の争いに介入すれば新たな諍いに発展する恐れもあり、パレッティア国立貴族学院は一種の閉鎖空間となっている事は周知の事実であった。
さて。今日は学院にとっては目出度き日であった。間もなく卒業を迎える卒業生達の最後の試験が終わり、その成績と今までの努力を称え合う祝いのパーティー。
楽団による優美な音楽が奏でられ、社交へと勤しむ生徒達。煌びやかなパーティーは思惑を孕みながらも、表向きは絢爛豪華な一時を楽しむ。……その筈だった。

＊　＊　＊

「――この場を以て宣言する。私はユフィリア・マゼンタとの婚約を破棄すると！」
高らかに力強い宣言が響き渡りました。その宣言を告げたのはパレッティア王国の王太子であるアルガルド・ボナ・パレッティア様。
まるで陽光を思わせるような白金色の髪は王族によく現れるとされた色で、青色の瞳は

穏やかな色合いに反して、強い意志を秘めて私を睨み付けています。

アルガルド様の口から紡がれたのは婚約破棄を知らしめるものでした。アルガルド様の宣言一つで、煌びやかなパーティーの場は瞬く間に祝いの場から弾劾の場へ変貌しました。

私、ユフィリア・マゼンタは驚きのままに呆然とする事しか出来ませんでした。恥ずかしながらも目を見開き、声も出せずに唇を噛みしめる事しか出来ません。ただ信じられないという一心でアルガルド様を見つめる事しか出来なかったのです。

私はパレッティア王国のマゼンタ公爵家の娘。それ故に次期国王であるアルガルド様の婚約者として、次期王妃として今日までやってきました。……それなのに。

「……アルガルド様。何故、婚約の破棄を？」

ようやく絞り出せた言葉は、アルガルド様への問いかけでした。婚約者としては不甲斐ないばかりなのですが、私はアルガルド様から好ましく思われていませんでした。

それでも私達の結婚は国王によって定められたもの。国の為には必要な婚約なのです。だから私は、いつかはアルガルド様にご理解頂けると。そう思っていました。

正直な気持ちを話せば、国王の責務を背負う事になるだろうアルガルド様へ恋慕の情はありませんでしたが、その支えでありたいと己に誓っていました。それがアルガルド様の婚約者として、私がこの国で果たすべき役割なのだと。

そう信じて、たとえ冷遇されようとも気にする事はないとやってきた筈ですのに。

「貴様は我が婚約者に相応しくないと判断した。貴様がレイニへ行った非道の数々、よもや言い逃れはすまい！」

レイニ・シアン。そう呼ばれた少女がアルガルド様の傍にいる。彼女はシアン男爵家の娘ですが、最近まで平民として育った子でした。シアン男爵も元平民であり、功績を積み重ねて貴族の末席に連なる事を許された成り上がりの貴族です。

そんな彼女の容姿はとても愛らしいと表現すべきでしょうか。艶やかに濡れた黒髪は夜空の色のようであり、伏せがちなその目は愛嬌の良さを感じさせます。素朴でありながら目を離せない。そして目を向ければその愛らしさに気付く。その容姿と出自故に何かと注目を集める相手だというのは知っていました。

何故、私が彼女の事を知っていたのかと言うと私の婚約者であるアルガルド様が気にかけていたご令嬢だからです。元々、アルガルド様の婚約は国王陛下が求められた政略結婚でした。それ故なのか、私もそうであるようにアルガルド様からも恋慕の情を感じた事はありませんでした。互いに国を担う義務感と責任があるだけと言われれば否定出来ません。

恐らくそんな私達の関係が良くなかったのでしょう。シアン男爵令嬢は私にはない魅力を持っていました。

愛嬌の良さ、愛らしい少女としての可憐さや、つい見守りたくなってしまうような直向きさは正に彼女の美点と言えます。

そんな彼女の面倒をよく見ているのがアルガルド様だと、そう噂されるようになっても私は危機感というものを抱いていませんでした。シアン男爵令嬢はその出自故に、学院に馴染めない様子をよく見かけたからです。そんな彼女を気遣ってか、アルガルド様はよくお声をかけているようでした。それ自体は良いのです。ご学友を思う気持ちを私が咎める事が出来ましょうか。

ただ、それでも私とアルガルド様は婚約している身です。婚約者がいる男性への過度な接触を見て幾らか苦言を零した事もありました。彼女との接点はただそれだけです。だからアルガルド様の言う非道の数々というのに私は心当たりがありません。

「もしもレイニ嬢に対する苦言の事を仰っているのであれば、そこに彼女を害そうとする意志など私にはございません！　そもそも何故このような事を、今この場で⁉」

むしろ衝撃を受けてしまっていたのはアルガルド様の短慮な行いにです。私達の婚約は国によって定められたもの。一個人の意志で覆せるものでは無いのです。ましてや、このような祝いの席で宣言していいものでもありません。何故ならば、この夜会には臣下となる貴族達もまた集っているのですから。

そんな事をアルガルド様が理解出来ない筈もないのに、どうしてこんな行動を起こしたのかが私には理解出来ないのです。

「アルガルド様。もしやとは思いますが、この話は陛下に了承を頂いているのですか？」

「父上には後で承諾を頂く」

「何故、親が定めた婚約を貴方の一存で解消などと！　ご自分が何をしているのか理解されているのですか⁉」

「父上にも母上にも文句は言わせない！　私は、私の意志で己の道を定める！」

アルガルド様の反論に私は息を呑んでしまいました。本当にアルガルド様はどうされてしまったのかと、私はただ混乱するばかりで首を左右に振ってしまいました。

「それは守るべき節度があってこその話です！　お考え直しくださいませ、アルガルド様！　よもやそこまで盲目になられましたか⁉」

「言うに事を欠いて盲目だと⁉　盲目は貴様だと知れ、ユフィリア！　王妃の地位欲しさに目を覆う所業を繰り返す貴様に王妃の資格などない！」

「ですから、心当たりなど……！」

私が弁明しようと声を上げましたが、遮るようにアルガルド様が一喝しました。その目にはありありと私への敵意が込められていました。

「レイニに対する過度なイジメ、所持品の盗難や損害、更には暗殺の企て！　その全ては貴様が裏で糸を引いている事は調べがついているのだ！」

アルガルド様から突きつけられた言葉に私は何の事なのか、心の底から理解が出来ませんでした。私はそんな事をしていない、と。そう反論しようとした時でした。

「証言します。普段からレイニ嬢に対する彼女の悪行の数々は我等が目にしました！」

アルガルド様の横に並ぶように男達が並びました。その並んだ姿に私は思わず歯噛みをしてしまいました。

「ナヴル・スプラウト様、モーリッツ・シャルトルーズ様、サラン・メキまで……！」

並び立った方々はこの国でも注目を集める地位の子息様達でした。

ナヴル・スプラウト様は王都を守る近衛騎士団長のご子息です。好青年と呼ぶべき人です。陽の当たり方で黒髪にも見える深い緑色の髪色、蜂蜜色の瞳は今は鋭く、私を睨むように細められています。

横に並ぶのは神経質そうな青年。癖がついた銀色の髪に、妖しい色をした紫の瞳を持つ彼はモーリッツ・シャルトルーズ様。我が国の国家機関である〝魔法省〟の長官を務める伯爵家のご子息様です。

そんな二人から一歩、引くようにして立つ溜息を零す程に美しい彼はサラン・メキ。

大人しく落ち着いた色合いの金髪に赤茶色の瞳を伏せ気味にしている彼は貴族ではありませんが、大きな影響力を持つ商会のご子息で特待生として入学していました。

いずれも学院では注目を集める者ばかりで、息を呑んでしまいました。唇を噛んでしまいそうになりながら私は彼等を睨むように見据えます。

彼等がアルガルド様に追随したのはわかります。彼等もまたシアン男爵令嬢と行動している所を度々目撃されていたのですから。ここに来てようやく私はレイニ嬢を虐めたとして私を陥れたいのだと理解しました。

「レイニは確かに平民上がりで貴族としての振る舞いが未熟な事もあるだろう。だが、それにしてもユフィリア嬢の叱責は度が過ぎているとしか思えない」

義憤に駆られたように強い口調でナヴル様が私を糾弾する。

「ええ、ええ。叱責というのにはあまりにも酷いと我等も日頃から思っていたのです。それに、自分の手は汚さずに取り巻きのご令嬢に嫌がらせを強要したとか！」

大袈裟な身振りを加えながらモーリッツ様が告げます。高みから私を見下ろすその瞳には明らかな蔑みが込められている。

「レイニもまた努力をしていたのに……幾ら身分の違いはあっても、流石にあんまりだ」

首を左右に振りながら残念そうに告げるサランに、一部同意するような声が紛れ始める。

それが切っ掛けだったのか、周囲から私へと向けられる視線に鋭い気配が増えていくのを私は感じました。そんな空気の変化に息を呑みつつも私は叫びます。

「私は、シアン男爵令嬢を指導しただけで傷を負わせようなどとした覚えはありません！」

「それが貴方の傲慢だと言うのだ！　ユフィリア嬢よ！　由緒正しき公爵令嬢、誉れ高き次期王妃様！　その身分に甘んじた貴方の心の甘えが咎を生んだのだ！」

非難するかのように叫ぶモーリッツ様の声が私の耳によく通りました。すると会場内から同調するかのように、そうだ、と続く声が嫌でも耳に入ってきます。思わず私は周りの声に信じられない思いで視線を巡らせてしまいました。

「それでも！　それに私は他のご令嬢にそのような指示などしておりません！　ましてやシアン男爵令嬢を貶めようなどという意図もございません！」

「見苦しいぞ、ユフィリア嬢！　貴方に指示されたと、そう涙を流しながら訴えた令嬢もいたのだぞ⁉」

怒りに満ちた声でナヴル様が一喝します。私はそんな指示を出した覚えなどないのに。その訴えをした令嬢は誰なのかと問い質したいのですが、彼等が答えるとも思えません。

一体、何故このような事になったのかわかりません。ただ周囲には私への疑惑や義憤が向けられる空気が蔓延していきます。

広がり続ける空気に私はそれでもやっていないと、そう訴えようとしました。しかし、喉が引き攣って声が出ない。唇だけが言葉をなぞるように震えただけでした。

「残念だ、ユフィリア」

「アルガルド様……」

「今までの行いを悔い、レイニへと謝罪せよ！　ユフィリア・マゼンタ！」

何を謝罪すると言うのか。私には、もうわかりませんでした。何が間違いなのかすらも。自分の無実を訴えなければとは思うのに、声は引き攣ったまま出てきそうにありません。

私は今まで様々な嘲りを受けてきました。次期国王であるアルガルド様の婚約者という地位は良くも悪くも人の注目を集めていたのですから。決して自分は弱いとは思っていませんでした。むしろ強くあろうとすらもしました。出来る事をこなして、皆の規範になろうと今まで自分に課してきました。

（でも、私は……本当に、皆の規範となる令嬢として振る舞えていたのでしょうか……？）

一度、疑問に思ってしまったら私の膝から力が抜けていきました。誰からも理解されず、言葉が通りません。どんな時でも、己が正しいと信じて振る舞えれば結果はついてくると思っていました。けれど現実は私の思うようにはなりません。

自分に不利な事はありました。陥れようとする悪意に立ち向かった事だって初めてでは

ないのです。けれど彼等に悪意はなく、己の信念に沿っているとわかってしまいます。

それが私には理解出来ません。だからこそ衝撃を受けて立ち竦んでしまい、ただ何故と思う事しか出来ずにいます。そんな現実に足下が崩れ落ちそうで。

……そんな時でした。この場の空気を一変させる気配が忍び寄ってきたのは。

「……ん？」

その気配に気付いたのは私だけではなかったのでしょう。アルガルド様も訝しげに耳を澄ませ、その音の発生源であるパーティー会場の窓へと視線を向けたようでした。

それは、何と言えば良いのでしょうか。風を勢い良く裂いて突っ込んできそうな音というか、それに混じって聞こえて来る誰かの悲鳴というか。

「――ァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ!?」

悲鳴そのものでした。そして悲鳴だと認識した次の瞬間、窓が勢い良く破砕したのです。

「……は？」

私は力が抜けそうだった事も忘れて棒立ちになってしまいました。窓を粉砕した何かがその勢いのままに、丁度私とアルガルド様の間を勢い良く転がっていきます。

弾劾の空気は塗り替えられ、破砕された窓の付近から逃れた者も含めて、誰もが呆気に取られながら窓を突き破ってきた何かに視線を奪われていました。

「いたたた……制御失敗、まだまだ研究が足りないなぁ」

ぱんぱん、と硝子の破片を払って立ち上がるのは美しい少女でした。

身に纏うのは動きやすさを重視した上着とズボン。この社交の場においてどう見ても似つかわしくありません。その筈なのに、彼女はどこまでも魅力に溢れていました。

どこか幼げな顔は煤で汚れても、その気品を穢す事は出来ていません。活力に満ち溢れた魅力と例えるのが正しいでしょうか。私はそんな彼女の顔に奪われるように視線を注ぐ事しか出来ませんでした。

彼女は足下に転がっていた箒のような形をした、けれど箒とも言えない器具を拾い上げます。瞳は優しい新緑を思わせる薄緑色で、どこか間の抜けたような愛嬌を感じさせます。

そして、その髪の色には誰もが息を呑みました。それはアルガルド様とよく似た王族の証明と言える白金色だったからです。アルガルド様に比べれば、どこか柔らかな陽だまりを思わせるような色の髪を彼女は揺らしました。

「貴方は……！」

そんな彼女の姿を見て、震える声で反応を示す者がいました。それはアルガルド様です。

その表情は驚愕から憤怒へと変わっていきました。そんなアルガルド様の変化に、騒ぎの中心となった彼女は気安げに片手を上げてみせます。

まるで今までの緊張が嘘だったかのように、明るい調子のままに彼女は口を開きました。

「あー、アルくん！　……これは、もしかしてお邪魔しちゃったかな？」

「ッ、姉上ッ!!」

どこまでも場に似つかわしくない彼女、パレッティア王国きっての〝問題児〟の称号をほしいままにする王女、アニスフィア・ウィン・パレッティアは爽やかに微笑みました。

＊　＊　＊

パレッティア王国にはある〝王女〟がいる。

パレッティア王国史最強の問題児、王国一の奇人変人、王族の煮詰めたアク等の様々な称号で呼ばれる王女。彼女こそが、アニスフィア・ウィン・パレッティア。

彼女が行う奇行の数々は月日を重ねる毎にネズミ算式で増えていき、今となっては彼女が起こす騒ぎは、またアニスフィア王女の仕業か、と言われる程だ。

曰く、空を飛ぶ為に風を利用して自分を吹っ飛ばして城壁にめり込んだ。

曰く、風呂を作るといって湯を沸かそうとして全身火傷を負った。

曰く、王都から新たに道を開拓する際に襲ってきた魔物を一人で壊滅させた。
曰く、結婚したくないからという理由で王の心が折れるまで奇行を繰り返した。
叩けばどこまで出てくるのかと、奇行の逸話の数々を持つのがアニスフィアだ。
正に〝キテレツ王女〟。馬鹿と天才は紙一重を行く唯我独尊の奇人。だと。
しかし、それとは別に彼女を言い表す言葉がある。
――〝誰よりも魔法を愛し、魔法に愛されなかった天才〟と。
この国では王族や貴族が当たり前に使える魔法を使えない王女。それがアニスフィア・ウィン・パレッティア王女。魔法を使えないからこそ〝魔法科学〟、略称〝魔学〟を編み出した異端の天才である。

＊　＊　＊

（えーと、これは不味い状況かもしれない……？）
私、アニスフィア・ウィン・パレッティアは考えた。目の前には着飾った貴族の子息や子女と思わしき子達がいっぱいいて、どう見てもパーティー会場の真っ直中。
私に向けられる視線は奇異の視線そのもので、正直に言えば居心地が悪い。もしかすると久しぶりの大失態かもしれない。

ちょっと飛行魔道具の夜間飛行のテストに出て、星が掴めそうなんてロマンチックな事を考えてたら、制御に失敗して窓に突っ込んだとか。うん、これは流石に許されない失敗なんじゃないかな？
そんな事を考えながら飛行用魔道具の〝魔女箒〟の調子を確かめてみる。よし、壊れてはいない。流石にこれまで壊れてたら泣きを見ていた所だ。まだ私の評判以外に傷ついたものはない！　よし、問題なし！
改めて会場を見れば、自分と同じ血を引く弟、アルくんがいた！　うーん、アルくんは私の事を苦手にしてるから悪い事をしちゃったなぁ。
（ん？　なんでアルくん、そんな守るように私が知らない令嬢を抱き締めてるのかしら？）
アルくんの婚約者の筈のご令嬢は、なんか見下ろされる位置にいるし。んん？　これはどういう状況？　気になった私はつい声に出して聞いてしまう。
「ちょっとアルくん。どうしてユフィリア嬢がいるのに別の女性を侍らせてるの？」
「……ッ、貴方には関係ない！」
うん、とても怒ってらっしゃる。いや、怒るだろうけどさ、そりゃ。凄い形相で睨まれてるんだけど。いや、色々と私達の間にはあったから仕方ないんだけど。それとこれとは

別の話でしょうに。

私が〝王族として出来損ない〟なのは良いとして、次期国王ともあろうものが婚約者であり次期王妃様の傍にいないのはどういう事なのか、と。そんな疑問から私はユフィリア嬢へと視線を向けてしまう。

「えぇと、ユフィリア嬢？　これはどういう事？　あれ、妾候補とか何か？」

ユフィリア・マゼンタ公爵令嬢。マゼンタ公爵家のご令嬢である彼女はとても、と頭につけてしまう程に美しい少女だ。その見目の麗しさに溜息を吐いていた者もまた多い。

まるで白い月の光を吸い込んだような、薄い銀色の手触りの良さそうな髪。令嬢らしい白く美しい肌、薔薇のようなピンク色の潤んだ瞳。身に纏っている空色のドレスと合わせて社交会の華と言うに相応しい出で立ちだ。

「え……？」

アルくんから視線を移して呆気に取られていたユフィリア嬢へと問いかけてみる。すると、途端に表情を翳らせて視線を落としてしまった。

「？　どうしたの？」

「いえ、その……」

ユフィリア嬢までどうしたの？　思わなかった反応に私は目を丸くしてしまう。大人に

も物怖じせずに意見を言える子で、将来の王妃として立派だなぁ、って思ってたのに。

なのに今にも泣きそうというか、あれ、もしかして実際に泣いてた？　そんなに私がいきなり窓をぶち破ってきたのが怖かった？

……いや、なんか違うな？　それにこの立ち位置と状況、なんか記憶がちりちりとするような気がする。すると、脳裏に過ったものがあってつい口を開いてしまう。

「……あぁ、成る程。言いがかりでもつけられて婚約破棄でもされたの？」

「――ッ!?」

何故、と言うようにユフィリア嬢が視線を上げる。その瞳は驚きで揺れていて、普段は鉄仮面をつけたように変わらない表情が変化してしまっている。

えぇ、どうしてさ。〝前世〟ではそういう〝お話〟があったのは知ってたけど！　実際に現実でも起きるような事なの？　いやはや世界はいつだって奇妙だね。私が言うのもなんだけど。あれ、もしかして笑える状況ではない？

「んー、状況を見る限り、フィリア嬢が孤立してる感じかな？」

「え、あの、なんで」

「うーん……よし、決めた！」

女の子、虐めるの良くない。どっちに正義があるのかわからないけど、とりあえず仲裁

に入ろうか。なんか味方がいなさそうなユフィリア嬢を庇っておく事にしよう。
状況がよくわからないけど追及すれば後でもどっちが正しいのかわかるだろうし。仮にユフィリア嬢に一方的な過失があったのだとしても、私がここで庇っても私に都合の悪いような事にはならないだろうしね。
「さてユフィリア嬢、行こうか。私が攫ってあげる」
「……え？」
「ユフィリア嬢は私に攫われるので、何の責任もなし！　さぁ、行こう、すぐに行こう！」
「え？　……え？　あの……？」
「という訳で、アルくん！　この話は私が持ち帰らせて貰うわ！　後で家族会議ね！」
そのまま呆気に取られたままのユフィリア嬢に近づいて、肩に担ぐように抱える。ははは、ごめんね。本当は攫うならお姫様抱っこなんかが良いんだろうけど、今は両手が塞がれると私が何も出来なくなっちゃうからね！
私がユフィリア嬢を抱えると、ユフィリア嬢が間の抜けたような声を出す。アルくんも焦ったような表情を浮かべ始めた。まぁ、待たないけどね！
「待て、姉上――」
「――それじゃあね、アルくん！」

アルくんに見せ付けるように笑みを浮かべて、私はユフィリア嬢を抱えながら走り出す。
一気に床を蹴り、私がぶち破った窓から飛び出す。そのまま宙に身を投げ出せば、体が重力に引かれて落ちていく。するとユフィリア嬢が元気に悲鳴を上げた。
「ぃ、いやぁぁぁあああああああッ!!」
「楽しいノーバンジージャンプだよ！　空の旅へようこそ、ユフィリア嬢！」
手に持った〝魔女箒〟を足にひっかけるようにして掴む。同時に勢い良く魔力を注ぐと、そのまま空を滑るように下がりつつあった高度が地を舐めるようにして上昇していく。
ユフィリア嬢が悲鳴を上げたままだけど、このまま父上の所に訪問と行きましょうか！

＊　＊　＊

魔法に愛されなかった王女がいた。王族や貴族なら誰でも得意、不得意はあっても使える魔法をまったく使えなかった彼女は蔑まれ、後ろ指を指されて嘲笑の的になった。
だけど、それでも彼女は魔法を愛した。そして彼女が行き着いたのは〝魔法と同じような効果を、或いはそれを越える魔法の道具〟を生み出す事。
これは後の歴史で様々な偉業と奇行の数々を残した王女の伝説、その一幕である。

1章　転生王女様は急には止まれない

「……ふぅ、やれやれだな」
ごきり、と硬くなった肩を解す。目の前には書類の山、今日の目標であった政務を終えた事で気を張っていた緊張が幾分か解れるようだった。まったく、国王の仕事は日々どんなに頑張っても減る事がないものだな。
「陛下、本日の政務お疲れ様でございました」
「良い、グランツ。そう畏まってくれるな」
私にそう声をかけたのは、この国の代表貴族と言っても過言ではないマゼンタ公爵家の当主であり、パレッティア王国の宰相を務める親友、グランツ・マゼンタ。
そしてグランツに声をかけられた私が、パレッティア王国の現国王、オルファンス・イル・パレッティアである。丁度、国王としての激務に一段落が付いた所だった。
「グランツ、茶を淹れよう。お前も飲んでいけ」
「それではご一緒させて頂きます、陛下」

「固いと言っているのだ、ここからは国王ではなく友として語らせてくれ」
「……承知した、オルファンス」
口調を崩したグランツに私は満足げに頷く。同じく三十代半ばを過ぎたというのにグランツの若々しさは衰えを見せない。
私の方はすっかり白髪などが目立ち、疲労が原因か、年よりも老けて見られるというのに。この差に思わぬ所がない訳ではない。私だってまだ老人と呼ばれる齢ではない。
グランツの実家たるマゼンタ公爵家の歴史は長い。王家の血を継いだマゼンタ公爵家は王家の象徴である白金色と近しい髪の色を受け継ぐ。だが世代を重ねた事によってその色も王家の色とは異なる色合いとなりつつあった。どちらかと言えば白金と言うよりは銀色に近いだろうか。
そして、何よりグランツの特徴はその目だ。赤茶色のその瞳は燃ゆる焔を宿したように圧の強い鋭さで、見る者によっては目を合わせただけで震え上がる。幸か不幸か、この目付きは娘や息子にも受け継がれているようで、なんともわかりやすい親子だと何度思った事か。
「……子は親に似るものだがのぅ」
鈴を鳴らし、王城付の侍女にお茶の用意をさせながら私は溜息と共に呟きを零す。

私の呟きを聞いていたのか、グランツが対面の席に座りながら視線を向けてくる。
「どうした？　また子供についてでも頭を悩ませているのか？」
「頭を悩ませなかった事などないわい！」
からかうように僅かに口元を上げて問うたグランツに私は苛立ち混じりに言葉を返す。
グランツの子供、特に娘であるユフィリアは私も実の娘のように可愛く思っている。
息子であるアルガルドの婚約者だからというのもあるのだが、それ以上にそう思ってしまうのは実の娘である、あの〝うつけ者〟の所為だ。
「最近は大人しいが、嵐の前触れではないかと戦々恐々とするばかりだ」
「アニスフィア王女は、それこそ嵐の申し子のような気質があるからな」
「何面白そうに笑ってるんじゃ、私は何も面白くはないぞグランツ」
ノックの後、侍女が一礼と共に部屋に入ってお茶を淹れて去っていく。淹れたばかりのお茶を飲み、一息を吐く。
「あいつももう十七歳だと言うのに、落ち着く気配が見えないのはどうしたものか……」
「落ち着いてしまえば、それはもうアニスフィア王女ではないだろう？」
「止めよ、気が滅入る……」
「致し方あるまい。アニスフィア王女の振る舞いを許したのは我々なのだからな」

グランツが優雅な仕草でお茶を口に運ぶ。グランツの言葉に私は苦虫を噛み潰したように表情を歪める事しか出来なかった。ストレスの為か、胃のあたりがずしりと重たくなるのを感じる。苦々しく思いながら、私は深々と溜息を吐き出した。

「世の中、何故問題というのは尽きないものなのかのぅ」

私はすっかり四十代どころか、五十代にすら見えかねないと言われる程に老け込んでしまった。王家の証である白金色の髪はくすみ、白髪が目立つようになっている。

顔の皺も気苦労の為か増える一方であり、最近では鏡で自分の姿を見れば気が滅入ってしまうようになってしまった。それだけに国王という重圧と責務は私にとっては負担なのだろう。それなのに容赦もなく面倒事を巻き起こす実の娘を思えば胃が痛くなる。

「しかし、その気苦労ももう少し楽になるのではないか？」

「む……。それはアルガルドとユフィリアの事か？」

「間もなくあの子達も卒業だろう。今後、本格的に次期国王と次期王妃として立って貰う事が増える。そうすれば自分達で他を導く機会も増える」

「……そうすんなりと行ってくれると良いのだがな」

「……例の噂を気にしているのか？」

私のぼやきにグランツは目を細めながら問いかけてくる。私は返事をするように頷く。

「ユフィリアにも確認は取ったが……アルガルドの奴め、男爵令嬢を囲うのは良いのだが節度というものを持って貰わなければ困るな」

「学院内部の情報は入りにくいが、それでも耳に入る程だからな。つまりはそれだけ表に出てしまっているという事に他ならん」

例の噂というのは、アルガルドがとある男爵令嬢を囲い込んでいるという話だ。ユフィリアが見咎め、何度も注意をしているという話は噂好きの貴族達の間では広まっている。

貴族学院はその性質上、どうしても閉鎖的で外部に情報が広がる事が少ない。それでもアルガルドの噂がここまで届くという事は、それだけ騒がれているという事でもある。それを思えば胃がじくじくと痛むばかりである。

「……すまん、グランツ。王家が無理を言って叶えた婚約だったのだが……」

「婚約者の心を繋ぎ止めるのもまたユフィリアの務めだ。アルガルド王子も節度を持って貰うというのはご尤もだが、これも良い薬となる事を祈るしかない」

グランツは淡々と答えているが、それはこの男が職務に忠実なだけであって愛情がないという訳ではない。むしろ愛するが故に次期王妃として立つ事になるだろうユフィリアに厳しい教育を施している。

表向き、パレッティア王国は平和そのものだ。だが、目が届きにくい所で多くの問題を

抱えている。将来を思えば、アルガルドだけでこの国を支えて行くのに不安を感じた私は婚約者として、幼少の頃から才能の片鱗を見せていたユフィリアを婚約者として望んだ。

しかし、どうにもあの二人が互いに想い合っているような関係には見えない。どちらにも義務以上の感情はないように見える。別に貴族の婚約ではそれも珍しい事ではない。

だが、そんな二人に不安を感じていた時にこの噂だ。流石に私も頭を抱えたものだ。

「しかし、ユフィリアがどうにかすると言ったのだろう？」

「それは、そうだが……王家が望んだ婚姻とはいえ、ユフィリアにだけ負担を強いるならば婚約を白紙にするしかあるまい」

簡単に頷く事が出来る訳ではないが、ユフィリアが望むなら婚約を白紙にする事も考えるしかない。元より婚約を望んだのは王家側なのだから、王家側の不始末を尻拭いさせたままというのは筋が通らない。

故にユフィリアに婚約破棄をするかどうか尋ねた事がある。それでもユフィリアが自分に任せて欲しいと言った。結局、私はユフィリアの厚意に甘えてしまった事になるのだが上手く行っているのだろうか……？

そんな不安を感じた瞬間だった。突如、部屋の扉が勢い良くノックされたのだった。

「国王陛下！　火急の報せにございます！」

「火急の報せだと……？　何があった！」

「アニスフィア王女が、例の飛行用魔道具を使って王城へ訪問されました！　陛下に謁見を求めるとの事です！」

「何をやらかした、あの馬鹿娘は⁉」

思わず声を荒らげて叫んでしまった。何故、あの娘は大人しくする事が出来ない……！

「それで、その……」

「その、何だ⁉　間を開けるのは止めい、疾く報告せよ！」

「失礼致しました！　アニスフィア王女なのですが、何故かユフィリア・マゼンタ公爵令嬢を同伴させており、状況を見るからに……誘拐してきたものと思われます！」

その報告を受けて私は目を回して一瞬、意識が遠退いてしまった。なんとか気を取り直そうと首を左右に振る。それでも湧き上がる憤りは収まらず、声に出てしまう。

「……何をやっとるんじゃ、あのじゃじゃ馬娘ェッ！　今すぐここに連れて来させよ‼」

＊　＊　＊

「ご機嫌麗しゅう、父上！　急な訪問、真に申し訳なく思ってまーす！」

「アニスッ！　貴様、今度は何をやらかした⁉　何故ユフィリアも連れている⁉」

うわ、父上が完全に怒り心頭状態です。いや、そうなるのも無理はないと思うけど。

貴族学院の夜会会場からユフィリア嬢を拉致……ごほん、連れ出した私はそのまま王城に向かい、父上に謁見を申し込んだ。ユフィリア嬢は目を回していたので、背負ったままだ。流石にあの完璧な公爵令嬢だと言われたユフィリア嬢でもいきなり空を飛ぶのは恐怖体験だったんだなぁ、なんて思ってしまう。

「落ち着いてください、陛下。アニスフィア王女殿下、ご無沙汰しております」

「あれ？　グランツ公もいらっしゃったのですか？　好都合と言えば好都合ですね」

父上の執務室には思わぬ人もいた。それはユフィリア嬢の父親であり、父上の懐刀としても名高いグランツ公だ。さっきの話をするなら好都合かな。

「……ユフィリア、いつまでそうしているつもりだ？」

「……うぅ……？　ッ、お、お父様!?　し、失礼しました！　アニスフィア王女！」

グランツ公の咎めるような声に反応したユフィリア嬢が勢い良く顔を上げて私の背から降りようとする。私がユフィリア嬢から手を離せば、跪く勢いでユフィリア嬢が頭を下げてしまう。

「あぁ、気にしなくていいよ。グランツ公も、今はちょっとユフィリア嬢に優しくしてあげてください。ちょっと今、不安定でしょうから」

「アニス、説明せよ！　今度は何をやらかした？　何故ユフィリアを連れている？」

「いやぁ、実は〝魔女箒〟の夜間飛行のテストをしてたら、星が綺麗で余所見をしてしまいまして。そのまま貴族学院の夜会に急遽参加してしまいました！」

「……このッ、馬鹿者があっ!!」

私が素直に報告すると、父上は勢い良く立ち上がって私の頭に拳骨を叩き落とした。

思わず目の前に星が散りそうな程の痛みだ。あまりの痛さに目の奥がカッと熱くなって頭を抱えてしまう。目の前で星が散ったよ！

「痛いです、父上！　酷い！」

「やかましいわ！　お前という奴は、お前という奴は！」

「私だって反省してるんですよ!?」

「反省しているならば繰り返すな！　何度過ちを繰り返せば学習するというのだ！」

「父上、失敗を恐れては人に進歩など有り得ませぬ！」

「予防をしろと言うのだ！　繰り返しては愚の骨頂だろうが、この愚か者が！　その頭は飾りではなかろう！」

二度目の拳骨が私の頭に叩き込まれる。あまりの痛さに頭を抱えて蹲ってしまう。

うぅ、父上の拳骨は痛いんだって……！　本当に酷いなぁ、もう！

「……ごほん。よろしいでしょうか？　アニスフィア王女」
咳払いをしてグランツ公が声をかけてくる。怒り狂っていた父上も、グランツ公の存在を思い出して落ち着いたのか、怒りを収めてくれた。というか、むしろ顔色が悪い。
グランツ公の鋭い目付きが私を睨み据えるように向けられる。ちょっと居心地が悪いけれど、グランツ公だしいつもの事だと思って居住まいを正す。
「何でしょうか？　グランツ公」
「それで、何故ユフィリアと共に王城へ？」
「あぁ、そうそう！　その報告に来たんでした！　父上！」
「なんだ、アニスよ」
「アルくんがユフィリア嬢との婚約を破棄するって言ってたんですけど」
「……は？」
たっぷり間を開けて父上が完全に動きを止めてしまった。横に立っていたグランツ公も思わぬ事を聞いたと言うように目を少し見開かせている。
「……すまぬ、アニス。どうも疲れからか聞き間違ったと思うのだが、何があったと？」
「ですから、アルくんがユフィリア嬢との婚約を破棄するって」
「は？」

「婚約破棄です」
「誰と誰が？」
「アルくんとユフィリア嬢が」
何度も繰り返すように父上に事実を突きつけると、父上があんぐりと口を開けて呆然と立ち尽くしてしまった。父上の前で手を振ってみたりするけれど反応はない。
ようやく再起動した父上は眉間を揉みほぐしながら、震える声で問いかけてくる。
「アルガルドが、そう言ったと？」
「さっきからそう言ってるじゃないですか！」
「……すまない。悪い夢だと言って欲しいのだが、事実なのか？」
明らかに信じられないといった声色で父上はユフィリア嬢へと視線を向けた。父上から改めて視線を向けられたユフィリア嬢は萎縮しきった様子で、肩を落として視線を下げたまま小さく呟いた。
「……はい。私の力が及ばず、大変申し訳ありません」
そのまま力なくユフィリア嬢は頭を下げてしまった。あまりの儚さに肩に手を添えてしまう。肩に触れた手から震えを感じ取って、私は唇を尖らせてしまった。
こうもなっちゃうよね。あんな夜会の会場でいきなり婚約破棄なんて突きつけられて。

どんなにユフィリア嬢が優秀でも、いや優秀だからこそショックも大きい筈だ。
「……なんという事だ！　アルガルドの奴め、一体どういうつもりだ!?　何も聞いてはいないぞ!?　しかも夜会の最中にだと!?」
「落ち着いてください、陛下」
「これが落ち着いていられるか！」
「あー、父上。お怒りになられる気持ちもわかるんですけど、ユフィリア嬢もショックを受けたばかりなので大きな声はあまり……」
　私が指摘すれば、父上は苦虫を噛み潰したような表情で声を抑えてくれた。隣に立っていたグランツ公が静かに溜息を吐いて、ユフィリア嬢へと視線を向ける。
「……ユフィリア」
「ッ、申し訳ありません、お父様……私が不甲斐ないばかりに、このような……」
　グランツ公の呼びかけにユフィリア嬢はもう頭が上がらないと言うように頭を下げてしまっている。震えは少しずつ強くなるばかりでいたたまれない。
「話を持ち込んだのは私ですけど、とにかくユフィリア嬢もあまり具合が良くないですし座っても良いですか？」
「う、うむ。そうだな……」

　私の提案に父上が頷いて、私達は来客用のソファーに座った。私の隣には父上が、私達の対面にはユフィリア嬢とグランツ公が座る。
　一度、腰を下ろして少しは落ち着いたのか、父上が咳払いをしてから話し始める。その顔には明らかな苦悶の色が浮かんでいる。まぁ、無理もないんだけどさ。
「……先程は取り乱してすまなかった。しかし、信じられぬ……」
「でも実際起きた事なんですよ、父上」
　父上が本気で頭を抱えてしまった。そりゃそうだよね、アルくんとユフィリア嬢の婚約って次期国王と次期王妃の婚約だった訳で。この二人の婚約にはとても大きな意味がある。だからこそのマゼンタ公爵家の令嬢であるユフィリア嬢が相手だったのに。
　だから婚約破棄なんてそう簡単に認められる筈がない。なのにアルくんが宣言したというのは常軌を逸しているとしか言えない訳で、父上がこうなるのも無理はない。
「……すまない、グランツ。私の見立てが甘かったと言わざるを得ない」
　頭痛を堪えるように項垂れた父上が心底、胃が痛そうに手で押さえながら呟く。だけど父上に謝罪を告げられたグランツ公は静かに首を左右に振った。
「陛下ともあろう方がそう簡単に謝罪を口にしてはなりません。……ユフィリア」
「……はい」

「お前とアルガルド王子の仲が進展していないという話は聞いていた。このような事になったのは残念ではある」
「……申し訳ありません」
「謝罪は不要だ。今、お前が考えなければいけないのは今後の振る舞いだ」
「どのような罰でも甘んじて受けるつもりです」
グランツ公の言葉にユフィリア嬢は悲痛な表情を浮かべて、まるで罪を言い渡されるのを待っているように見えた。そんなユフィリア嬢に視線を向けるグランツ公の眉がぴくりと上がった。何とも緊張感のある二人の会話に私は思わず口を挟んでしまう。
「こほん。……グランツ公、少しよろしいでしょうか？」
「何でございましょうか、アニスフィア王女」
「恐らくですけど、グランツ公は叱責しようという訳ではないと思います。ですがユフィリア嬢も突然の事で前後不覚になってると思われます。もう少し柔らかく接してあげたら如何でしょうか？　それにユフィリア嬢も。突然の事で驚くのはわかるけど、もっと気を楽にして良いんだよ？　私も含めてここにいる人達はきっと貴方の味方だから」
私の言葉を受けてユフィリア嬢が顔を上げる。まるで何を言っているのかわからないという表情で私を見ている。そんなユフィリア嬢に私は笑いかけてみる。

「とりあえず！　まず状況を整理しましょう！　父上達も幾らか把握している事もあるのでしょう？」
「……お前がまともな事を言うと釈然とせんな」
「酷くないです!?」
「自業自得だろうが、愚か者が！」
解せない。まぁ、良いけどさ。思わず唇を尖らせてると父上が私に礼を告げて来た。
「アニスよ。お前が貴族学院の夜会に乱入した件は後で追及するとしてだ。偶然とは言え、ユフィリアを保護してくれた事には礼を言う」
「えぇ、本当に偶然でしたけれどね」
「アルガルドへの追及は行わなければならんな。まずはアルガルドに謹慎を言いつけなければ……」
「あぁ、父上。なんか他にも関わってる人達がいたみたいなので、その人達も押さえた方が良いと思いますよ？」
父上が嫌そうな顔をした。懐に手を入れて、中から愛用している胃薬を取り出してる。そのまま薬を飲み込む父上の姿には哀愁が漂っているように見えてしまう。事が事なのもあるけど、私を相手にしてると疲れるんだと思う。流石に自分が悪い自覚はあるよ？

でも本来だったら私はこの件に関しては部外者だ。王族ではあるけど、私は王位継承権を放棄してる身だし。

だから王位に関係するような揉め事には関わるつもりもなかったんだけど、流石に今回は不可抗力というか、事故というか。まぁ、それは後にして。

「事件の内容や経緯を調べるのも大事ですけど、後始末もあります。具体的に言うとユフィリア嬢の今後についてですけど」

「……ユフィリアの今後、か」

父上が心底、悔やむように苦々しい声で呟きを零した。この際、アルくんが告げた婚約破棄の正当性があるかどうかは問題じゃないとして。公の場で起こしてしまった為、この一件が人目に触れてしまっているのが問題だ。

何がダメかって、ユフィリア嬢の今後の結婚についてが難しくなってしまうから。一度口に出してしまった以上、婚約破棄の宣言はなかった事にはならない。そんなアルくんとよりを戻せと言う訳にもいかない。

そうなると次に問題になってくるのがユフィリア嬢の今後だ。婚約破棄なんて社交会では良い嘲笑の的だ。それも次期王妃ともされていたユフィリア嬢なら尚のこと。更には生家のマゼンタ公爵家は公爵の名に恥じない功績を残している名家でもある。

そんなユフィリア嬢が婚約破棄をされてしまったなんて、嘲笑の的にするのには格好の餌食だ。こうなると次の婚約相手を決めるのにも問題が出てしまう。

一度、王家から袖にされてしまった令嬢を婚約させるとなると相手がかなり限定されてしまう。これは大きな問題だ。つまりユフィリア嬢の今後の令嬢人生に致命的な傷を負わされてしまったという訳だ。それも王家側の一方的な都合で。……うん、色々とまずい。

「……ユフィリアの才覚では、下手に外に出す訳にもいかぬ……」

「ユフィリア嬢を外国に嫁に出すのはそれはそれで難しいですね。何せ天才公爵令嬢！稀代の天才児！　精霊に愛された申し子！　ユフィリア嬢のお噂はよく耳にしました！」

ユフィリア嬢は同年代の中でもずば抜けて出来が良い令嬢である。礼儀作法だけではなく魔法や武芸においても優秀な才能を示す、まさに天才児という奴だ。

そこにユフィリア嬢の美貌も加わるのだ。公爵令嬢としての威厳を見せ付ける佇まいに相応しい白銀の髪に白い肌、強いてあげるなら目付きがキツい事が欠点だけど、次期王妃として振る舞うなら威厳なんて幾らでもあった方が良い。

だからこそユフィリア嬢は次期王妃として相応しいなんて声がそこかしこから聞こえてきた訳で。私も噂は良く聞いてたし、遠目で見た時は流石に女としての敗北感を覚えたよね。いや、私は別に女を磨いている訳ではないんだけどね。

自分と懸け離れてるからこその尊敬というか、そんな感じ？　幼い頃から才能の片鱗を見せ付けた結果、ユフィリア嬢は王家に望まれて婚約者になった。その実力は計り知れないと、ユフィリア嬢の凄さはこれでもかと語られている。

だからこそ、外国に嫁に出すなんて事も出来ない。ユフィリア嬢の力がそのまま外国の力になり得るからだ。こうなると、もう目も当てられない。

だからと言って国内に相手がいるのかというと、王家と一度揉めてしまった令嬢と婚約をしても良いという相手がどれだけいるのかという話になる。加えてユフィリア嬢は公爵令嬢なのだから、その身分に見合う相手となると狭い門がただでさえ狭くなる。

端的に言うと、色んな意味で詰んでる状況だ。ちらりとユフィリア嬢へと視線を向けてみると、項垂れて視線を下げたまま暗い影を背負ってしまっている。

無理もない。それだけ王妃教育っていうのは重いものの筈だし。将来、国を背負う者として育てられて、それ以外の多くのものを捧げたに違いないだろうし。私はその責務から全力で逃げちゃったからなぁ。

正直、私が逃げた事で廻り巡ってユフィリア嬢に向かった可能性があって、私としてもこのままユフィリア嬢を放っておけないって気持ちになるんだよねぇ。

指摘するまでもなく父上はユフィリア嬢の今後の展望の暗さには気付いているだろう。

そうなると無言のままのグランツ公の威圧感がちょっと怖くなってきた。でも、簡単に解決できる問題ではないしなぁ。それこそ大きな功績でも立てないと。……ん？　功績でも立てないと？　そこで、ぴこん、と音を立てて私の頭の中に名案が浮かんだ。

「父上！」

「なんじゃ、いきなり大きな声を出しおってからに！」

「ユフィリア嬢の今後についてなのですが、認識としましては今後のユフィリア嬢の婚約についてなどで悩んでいると見て良いでしょうか？」

「……それはそうだが、どうした？　なんだか凄く嫌な予感がするのだが」

「このアニスフィア、名案がございます！」

明らかに父上が嫌そうにげんなりし始めた。さっきから失礼だよ、父上！　すると静かに控えていたグランツ公も私へと視線を向けて来た。グランツ公の視線の圧が強い。穴が空きそうな程に見つめられて居心地が悪い。

「アニスフィア王女、その名案とは？」

「はい。現在、ユフィリア嬢には婚約破棄を突きつけられ、貴族令嬢として決して浅くない傷を負ってしまいました。更にユフィリア嬢は稀有な才能の持ち主。次の婚約者を宛がおうにも相手が厳選される可能性が大きく、なかなか先の見通せない状況かと思います」

「そうなってしまうだろうな。……それで妙案というのは何だ？　何故か途轍もなく嫌な予感がするのだが」
「はは、失礼な。今回の婚約破棄がアルくんの独断で王家側に一方的な過失があったのだとしても、ユフィリア嬢が婚約破棄の宣言を諌められなかった事実までは無くなりません」
今回、アルくんに一方的に過失があったのだとしても、こうなる前に止められなかったんだからと、ユフィリア嬢の能力を疑う声はどうしても出てくると思う。もう事は起きてしまった訳だから、こればかりはどうしようもない。
「こう言っちゃうと、ユフィリア嬢にも責任が生まれてしまうのですが……」
「それは事実かと。実際にアルガルド王子をお諌め出来なかったのは、こちらの落ち度でございます」
「はい。一度してしまった失敗はそう消えません。しかし、失敗を取り戻す事は可能です。その為にはユフィリア嬢に功績を積んで頂けば良いかと思います」
グランツ公は目を私から逸らさずに一言一句、聞き逃しがないように見てくる。奇妙な緊張感が漂う中、気が急いたのか父上が私を胡乱げな表情のまま問いかけて来る。
「……つまりお前は何を言いたいのだ？　回りくどい、結論を申せ」
「では単刀直入に。――父上、グランツ公！　私めにユフィリア嬢を下さいませ!!」

その場の空気を一言で言い表すのなら凍り付いたという表現が正しい。私の発言に父上は一気に顔を引き攣らせて、グランツ公は少しだけ目を見開かせた。
そして当事者であるユフィリア嬢は何事かと、顔を上げて私に視線を向ける。私はそんなユフィリア嬢に微笑んでから、改めて父上とグランツ公に向き直る。
「私が全力でユフィリア嬢を幸せにしてみせます！　どうか許可を！」
「待て待て待てィ！　何をとち狂った事を言い出すのだ、お前は!?」
父上が顔色を青くさせながら勢い良く立ち上がって私を睨み付ける。誰がとち狂ってるですか！　至って真面目ですよ、こっちは！
「アニスフィア王女。ユフィリアを求む、というのはどういう意図でございますか？」
グランツ公がいつもの調子に戻りながら問いかけて来る。私はそれに一つ頷く。
「ユフィリア嬢を私の助手としてお招きしたいのです」
「……助手、ですか？」
ユフィリア嬢が困惑しきった様子で首を傾げている。ちょっと可愛い。撫で回したい。
私の内心を察したのか、父上の視線が鋭くなった。気を取り直すように私は咳払いをする。
「私が〝魔学〟の提唱者だというのは既にご承知の事かと思いますが、その魔学を研究したり、発表したりする際の助手としてユフィリア嬢が欲しいのです」

「……まさかとは思いますが、アニスフィア王女。貴方は魔学の功績をユフィリアに発表させる事で功績にさせようとするつもりでしょうか？」

「はい！　その通りです、グランツ公！」

魔学は私が前世の知識で垣間見たものを再現しようとしたり、その発想を用いて魔法を解明していく私の研究の名前だ。魔法科学だから、略して魔学。私の魔女箒も魔法で空を飛びたいっていう発想から生まれた成果の一つだ。

「魔学は細々とながら、父上が確認をした上で認可したものは世に広められてきました。しかし、魔学は私の事情で公に大きな功績として喧伝する事を控えています」

「魔学は革新的な発想から生まれたもの。そしてその魔学から生まれた魔道具も。それはパレッティア王国へ与える影響が大きすぎた。……そうですね？」

「はい。だから私は魔学の功績が大々的に広められないように父上に進言しました。次の国王は私が良いんじゃないかと、そう言われると面倒になりますから」

アルくんは弟だけど、男児だったから王位継承権はアルくんの方が優先される。だけど私も腐っても王族だから王位継承権を〝持っていた〟。そう、過去の話ね。

ほら、私って魔法が使えないから。王女なのに魔法が使えないから魔学の功績があっても、この国の成り立ちからすると王様として受け入れて貰えないんだよね。

パレッティア王国は簡単に言うと魔法と共に発展してきた国だ。初代国王が精霊と契約し、共に歩んで来た。そして精霊から授けられた魔法で国を興した。

そして貴族が臣下として王と一緒に歩み、パレッティア王国が成立した。だから魔法を使えるって事が王族としてかなり重要視されるんだけど、その王族である私がまさか魔法が使えなかったんだよね。

誰もがそんな私の扱いに困った。私は私で魔法が使えないなら自分が使える魔法を研究しようって決めた。だから私は魔学を研究するって決めた時から王位継承権を捨てたんだよね。だって持ってても余計な諍いしか生まないって思ったから。

最初こそ父上も抵抗してたけど、私も当時はやりすぎなぐらいに突き抜けてみせたので諦められたんだよね。それで無事に私は王家に籍は残しつつも、政務には関わらない名ばかりの王女になった訳なんだけども。

「なのに父上が最近色々と仕事を押し付けるから変に有名になったと思うんですけど」

「逆じゃ、逆！　お前が目立つから逆に組み込んだ方が手綱を取れると考えたのだ、考え無しのキテレツ娘が！」

「えー……？」

でもだからって政務の面倒事を私に押し付けるのはズルくない？

私の趣味にも絡む事だから普段は文句も出ないけど。……おっと、話が逸れてしまった。本題に戻さないと。

「私は魔学が広まる分には良いんですけど、表舞台に立つつもりはないです。それならユフィリア嬢と共同研究にして、ユフィリア嬢の功績にしたらどうでしょう？」

「……確かに。婚約破棄の話題を打ち消してしまえるだけの価値はあると思います」

「でしょう？　ほら、あとはあれですよ。私、魔法使えませんから。魔法を使える助手が欲しかったんですけど、その点で言えばユフィリア嬢って喉から手が出る程に欲しい人材なんですよ！」

「……私が、ですか？」

「そうだよ！　貴族令嬢としても有能で、武芸にも心得があって、更には使える魔法属性の適性数は歴代一と言っても過言ではないと言われる精霊に愛された寵児！　ユフィリア嬢はパレッティア王国の宝といっても過言じゃないんだよ！」

この世界の魔法は精霊からの恩恵とされている。ユフィリア嬢はその魔法を多種多様に扱えるとの事で有名なのだ。

ぶっちゃけ、凄く欲しい。さっきも言ったけど喉から手が出る程に欲しい人材だ。私の個人的な研究だし、私ってこんなんだから一般的な貴族から評判が良くない。

だから助手なんて欲しいと思っても雇えない。そこにユフィリア嬢だよ！　婚約破棄に付け込んでと言えば聞こえは悪いけれど、この旨い話を逃す理由もない。結果的にはユフィリア嬢の為になる訳だし！

「……確かに理に叶ってる話だと、私も思います」

「でしょう！　ね？　だから父上、いいでしょ？」

「アニスよ。……お前は、私に王位継承権を放棄すると伝えた時の話を覚えているか？」

父上が凄く渋い顔をして腕を組みながら問いかけて来る。その問いかけの内容に何だっけ？　と首を傾げたけど、すぐに思い当たる事があって掌の上に拳をぽんと置いた。

「……あぁ、あの例の宣言ですか」

するとグランツ公も気付いたのか、何故か溜息交じりに呟く。父上とグランツ公の様子にユフィリア嬢は戸惑ったように視線を二人の間で彷徨わせている。

「お父様、あの……何のお話ですか？」

「……アニスフィア王女が王位継承権を放棄したいと言い出した時にこう言い放ったのだ。『男性との結婚などごめんです。愛でるなら、私は女性を愛でたいです！』と、な」

グランツ公の言葉にユフィリア嬢が目を見開かせて私の顔を見た。その視線に少しだけ距離を感じてしまう。いや、うん。でも本心だしねぇ。

「だって結婚して子供とか生みたくないし」
「お前という奴はぁぁぁァァァァッ!!」
「ギャァァァァッ!? アイアンクロー痛いッ！ 痛いです、父上！ 離してください!!」
父上が渾身の叫び声を上げながら私に掴みかかって来る。父上の指が顔に食い込む！
しかも持ち上げられて足がつかない！ 待って、本気で痛いから!!
「お前は王族としての心構えや責務を塵芥のように扱いおって……！」
「痛い痛い！ だ、だって……！ 魔法も使えない私の血を王家の血として残すのは……本末転倒じゃないですか……！ 私、間違ってない！」
「大間違いじゃ、たわけ者！ お前の魔学は評価には値するが、結婚まで嫌と抜かすな！」
「言質取りましたもん！ 結果を出したら一生結婚しなくていいって！ アイタタッ！
父上、顔が変形する！ 変形しちゃう……！」
「あの頃の私の胃痛に比べれば何倍もマシだわ！」
ぺい、と投げ捨てるように父上が私を解放した。あー、痛かった。潰されるかと思った。
確かにあの宣言をした時は阿鼻叫喚の地獄絵図になっちゃって、流石にちょっと反省はした。でも、本心だからいつかバレるだろうし。だから先回りして芽を潰しただけだし。
それで私の噂が広まって、私が〝同性が好き〟って話が出回ってるんだよね。

女の子が好きなのは否定しないんだけどね！ 別に男の人も嫌いって訳じゃないんだけど、恋愛とか婚約とか結婚とかが絡むと途端に受け付けなくなるだけで。
「……アニスフィア王女。一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」
「何でしょうか。グランツ公？」
「ユフィリアを助手として望むのは、助手という文字通りだけの意味でしょうか？」
グランツ公が視線を逸らすことなく真っ直ぐに見つめて来る。その私を見透かそうとするような目に、ここまで来るといっそ慣れてきてしまった。
「んー。いえ、確かに貴族令嬢としても魔法使いとしても魅力で助手として望んでいますが、はっきり言いますと……」
「言いますと？」
「ユフィリア嬢は私の好みです！」
「もう頼むから黙ってくれんか、アニス！」
「お断りします！」
「腹立たしい表情をしおってからに……！」
今度は顔面を掴まれないようにグランツ公達のソファーの後ろ側に逃げ込む。するとユフィリア嬢と視線がばっちり合って、ユフィリア嬢が少し距離を取った。

ちょっとショック。まぁ、仕方ないよね。私も噂の否定はしてないし。ただ、それだと勧誘に困るのでフォローしないと。

「あー、その。同意がない相手には手を出さないというか、誰でも良いって訳じゃないよ？　私も別に遊び人って訳でもないからそういう心配はしなくていいから。ユフィリア嬢と仲良くなりたい理由はいっぱいあるんだ」

「……私と、ですか？」

「だってアルくんの婚約者だから迂闊にお茶にも誘えないし！　正直に言ってこの状況は良くないけど、私としては歓迎してるんだよ！　ユフィリア嬢も災難だったと思うけど、ねぇ、どうかな？　私と一緒に魔学を研究してみない？」

「……私だと都合が良いからですか？」

どこか自嘲気味に僅かに口の端を上げて視線を逸らすユフィリア嬢。いきなり婚約破棄を突きつけられて、落ち込む気持ちもわかるんだけどなあ。

「確かにそうだって言えばそうだ。でも、違うって言う事も出来る」

「……？」

「ユフィリア嬢が決めていいよ、貴方が選びたい理由を。ユフィリア嬢が辛くて苦しそうで助けたいから。この言葉を信じても良いし、別の理由だって構わない」

私の言葉にユフィリア嬢が目を見開く。私はユフィリア嬢の頬に手を伸ばして頬を撫でる。頬に手を添えた手で、ユフィリア嬢を私の方へと顔を向けさせる。距離が近づくけれど、そのせいで尚更、ユフィリア嬢の美貌を確認してしまう。

ユフィリア嬢を遠目で見かけた時は、無表情か、絵に描いたようなお手本そのままのような微笑を浮かべている所ばかりだった。でも、今の彼女は素の感情を隠す余裕がないのか困惑や不安で瞳を濡らしている。

「私が信じられないなら、ユフィリア嬢が私にとって都合が良いからだって諦めても良いよ。それも否定しないから。もし、いつか助けたいという言葉が信じられるようになったら信じてくれればいいからさ」

労るようにユフィリア嬢の頭を撫でながら、私は言葉を続ける。どうか少しでもユフィリア嬢が抱える重みや痛みが楽になるようにと思いながら。

「別に信じて貰うのなんて後からでも良い。だからユフィリア嬢は好きな理由で、選びたい理由で私の所に来てくれるといいなって思ってる」

私の言葉にユフィリア嬢はただ呆けたように私を見ている。まるで迷子のように、どうしていいかわからないといった様子で。

「ユフィリア」

そんなユフィリア嬢の視線を奪ったのはグランツ公だった。ユフィリア嬢の隣に座っていた彼は、ユフィリア嬢を挟んで向こう側にいる。

能面のように思える無表情でユフィリア嬢を見つめていたグランツ公は、ゆっくり息を吐き出すように告げた。

「……すまなかったな」

突然のグランツ公の謝罪に私でさえも目を見開いてしまった。父上も目を見開いているし、何より反応が凄かったのはユフィリア嬢だった。何を言われたのか理解が出来ないという表情でグランツ公を見上げる。

「お父様？」

「ユフィリア。お前は次期王妃として、マゼンタ公爵家の令嬢として恥じないように努力をしてくれた。だが、最初にお前にそうであれと望んだのは私だったのだろう」

言葉を選ぶように、ゆっくりと。確かに何かを伝えようとグランツ公は言葉を重ねる。その姿は公爵というより、不器用な父親のように私には見えた。普段の鋭さを隠れさせて後悔を滲ませたような表情と声色で続ける。

「私が望んだ事にお前が応えてくれるならば、私は背を押す事こそが正しいと。厳格な父として、マゼンタ公爵家を背負う者として接する事を良しとした」

「……何を、何を仰ってるのですか⁉」

「私は、それが間違いだったのかもしれないと感じている」

ユフィリア嬢は信じられない、と言うように身を乗り出した。そのまま取り乱しながら首を左右に振る。その瞳には怯えにも似た、動揺の色が浮かび上がっている。

「今の私があるのはお父様の教育の賜物です！　そこに後悔などございません！　ましてやお父様が間違いなどと、そのような事もございません！　全て至らぬ私がいけなかったのです！　公爵令嬢として、次期王妃として至らないばかりに家の名に泥を塗ってしまった愚かな娘です！」

「愚か者など私の娘にはいない」

ユフィリア嬢の悲痛なまでの叫びを一刀両断で切り捨ててしまうような強い否定の言葉だった。私も吃驚したけれど、ユフィリア嬢はもっと驚いたようで肩を跳ねさせた。ユフィリア嬢はグランツ公の言葉に小刻みに体を震わせている。

ぱくぱくと開閉する口は何かを言いたげだけど、言葉にする事は出来ないようだ。言葉をなくしたユフィリア嬢を真っ直ぐに見つめてグランツ公は続ける。

「お前は私の期待によく応えた。それは最早、応えすぎる程に、望んだままに。……今はそこにお前の意志があったのかと疑ってしまう。もしそうならば、それは私の咎なのだ」

淡々とそう告げるグランツ公の姿は、普段の威厳からは想像も出来ない姿だった。とてもじゃないけど、あの筆頭貴族と言われたマゼンタ公爵家のグランツ公の言葉だとは思えない。それでも、その言葉は確かにグランツ公が紡ぎ出した本心だったのだと私は思う。それでも、ユフィリア嬢は受け入れられないとばかりに悲痛に叫んだ。

「何を言うのですか……？　お止めくださいませ、お父様。そのように仰らないでください。そんな事を言われたらどうして良いか、私にはわからなくなってしまいます！」

「そうだ。お前にはわからないのだ。自分が苦しい時は、助けを求めても良いという事を」

グランツ公が表情を崩した。僅かな変化だったけれど、だからこそ困ったように苦笑しているのがわかってしまった。グランツ公の伸びた手がユフィリア嬢の頭を撫でた。頭を撫でられて信じられないという表情でユフィリア嬢はグランツ公を見据える。

「まるで幼子だな、ユフィ」

不慣れだけれども、ユフィリア嬢を労るような手付きでグランツ公は頭を撫で続ける。まるで普通の親子がそうするように。

「お前の心は成長を止めてしまっていたのだな。苦しい時には苦しい、辛い時には辛いと、そう教える事も出来ないままにお前は大きくなっていた。お前は小さなユフィのままなのだな。私は、ただお前に外面を装う事しか教えられなかった」

グランツ公の言葉にユフィリア嬢の顔が勢い良く歪んだ。それは泣きそうな、それでいて怒りを隠せないような、一言では言い表せない表情に変わっていく。

「お止めください、お父様。幾らご自身の事とはいえ、お父様を卑下する言葉など聞きたくありません……！　咎められるべきは不出来な私なのです！」

そのユフィリア嬢の叫びが、どれだけ彼女がグランツ公を慕っているのかを示している。その告白は間違いだと、間違っているのは自分だと。そうでなければおかしいと言うように。けれど、そんなユフィリア嬢の訴えにグランツ公は苦笑を深めた。

「お前が不出来ならば、私もまた不出来なのだろう。親としても、人としてもな。将来、国を背負うだろうお前を想像し、大いなる期待を私は寄せていた。同時に待ち受けるだろう苦難を退けられるようにと己を律し、お前に厳しく接して来た。だが、それは鎧を纏わせるだけでお前自身という中身を鍛えるには至ってはいなかった。情けない話だ」

「お父様……！」

イヤイヤと駄々をこねるようにユフィリア嬢が首を左右に振る。首を振った勢いでユフィリア嬢の瞳からは涙が零れ落ちていく。

ユフィリア嬢が首を振った事で払われたグランツ公の手は、今度はユフィリア嬢の涙を拭うように触れた。まるで壊れ物に触れるように。

「私が許そう。王から望まれた婚約だとしても、お前が降りたいと思うならば私が叶えてみせよう」
「……ッ！」
「だから教えて欲しい、ユフィ。……王妃になるのは辛いか？」
グランツ公の問いかけにユフィリア嬢が唇を噛み切らんばかりに歯を立てた。しかし、傷を負う前にユフィリア嬢はゆっくりと力を抜いた。まるで張り詰めていた糸が切れてしまったかのように。そしてその両手で顔を覆い隠してしまう。
「……申し訳ありません、お父様。もう、私には無理です……」
ユフィリア嬢は引き攣りそうな程に張り詰めた息を吐き出して、消え入りそうな言葉を紡ぐ。それは今にも泣き出してしまいそうな声だった。そんなユフィリア嬢の言葉を受け止めたグランツ公は静かに頷く。
「そうか……わかった。よく話してくれた」
「……はい。もっと私はお父様を頼るべきでした。親の七光りなどと言われては次期王妃に相応しくないと、そう思っていたのです」
「その心がけは大事だ。だが、時として人を上手く扱うのも良き貴族の務めだ」
「……はい」

小さく頷いたユフィリア嬢に、グランツ公も安堵するように息を零した。そしてグランツ公はユフィリア嬢の肩に手を置いて告げた。
「ユフィ、私からもアニスフィア王女の下に行くのを勧める。だが決めるのはお前だ」
「え……？」
「この状況では要らぬ詮索を受けてしまう事は間違いないだろう。そんな中でお前が見つかればどうなるのか、想像するのは容易い事だ」
今の状況でユフィリア嬢が人前に出れば、それはもう騒ぎにしかならない。良くて質問攻めにされるか、悪くて誹謗中傷の的になるだろうと思う。言ってしまえば一大スキャンダルな訳だし、騒がれない方がおかしい。
「……それで何故、アニスフィア王女の下へ行くのが良いと？」
力なく顔を上げたユフィリア嬢に真剣な表情に顔を引き締めたグランツ公がちらり、と一瞬だけ私に視線を向けてから続ける。
「アニスフィア王女の住まいである離宮は王宮の敷地内ではあるが、離れに建っている事は知っているだろう。我が屋敷よりも人目に付きにくい。ましてや王宮敷地内での事だ。何かあれば私も駆けつけやすく、身を隠すのに適している。更にアニスフィア王女の提案の一件もある。私はそう悪い話だとは思っていない」

「お父様……」
「お前は今日までよく頑張った。一度、公爵令嬢としてでも、次期王妃としてでもない、そんな時間がお前には必要なのだろう。アニスフィア王女殿下はお前の肩書きを求めてはいないのだからな」
「まぁ、それはそうですけど」
私がユフィリア嬢を望んでるのはユフィリア嬢個人の資質を見込んでの事だし。グランツ公は私の呟きが聞こえていたのか、ユフィリア嬢に見せるように大きく頷いてみせる。
グランツ公の顔に浮かんでいたのは、やはり父親としての顔だった。娘であるユフィリア嬢の幸せを願う、たった一人の父親の姿だ。
「今後の人生、お前がどう歩むのか少し私から離れて考えてみなさい。ユフィ」
「しかし、それでは家に迷惑を……」
「この程度で揺らぐ私でも、公爵家でもない。お前は私が信用出来ないのか？」
父親としての顔を公爵としての顔に切り替えてグランツ公はユフィリア嬢に問いかけた。
一瞬、息を呑んだユフィリア嬢はそっと首を左右に振る。
「……いえ、そのような事は」
「であれば、あとはお前の気持ち次第だが……今のお前に決めよと言っても酷だな」

ユフィリア嬢から視線を外して、グランツ公が私に視線を移す。私はグランツ公の視線を受けて頷いてみせた。
「どの道、事の真相を詳らかにはしなければならない。その間に余計な横槍を入れられるのも癪だ。故にアニスフィア王女、暫しユフィを預かって頂けないでしょうか？　アニスフィア王女の申し出を受けるかどうかは、その間でも、後でも構わないでしょう？」
「えぇ、むしろ私は喜んで！」
やった！　思わず小躍りしそうな程に喜びを込めてグランツ公に返事をしてしまった。
そんな私を見て、父上が頭痛を堪えるような表情を浮かべて呟く。
「……アニス。頼むから余計な事だけはしでかしてくれるなよ」
「本当に失礼ですね、父上！」
「普段のお前ほどではないわッ！」
思わず父上の言葉に抗議すると、父上に疲れ切ったように肩を落とされた。解せぬ。
ユフィリア嬢もグランツ公にここまで言われれば否定する気もないのか、どこか不安げに私を見つめている。私はそんなユフィリア嬢に苦笑を浮かべながら手を差し出す。
「ユフィリア嬢、短い間になるかもしれないけれどよろしくね？」
「……はい。アニスフィア王女」

「アニスでいいよ。その代わり、私もユフィって呼んで良い？」
「え？　か、構いませんが……」
「やった！　じゃあ改めてよろしく！　ユフィ！」
おずおずと差し出された手を握って、軽く上下に振りながら私はにこやかに笑ってみせた。困ったように眉を下げながらもユフィも笑ってくれた。
いつか、この笑みが心の底からの笑みになってくれればいいなと。私はそう願わずにはいられなかった。

＊　＊　＊

「……本当にこれで良かったのか？　グランツ」
話が纏まり、退室していったアニスとユフィリアを見送った後の話だ。私はグランツにそう問いかけた。グランツは何も言わず、二人が去った扉を見つめている。
「これが最善だろう。ユフィが今後、表立って動くには婚約破棄を宣言された影響は大きすぎるからな」
「本当に最善か？　あのアニスだぞ？　本当に大丈夫なのか？」
「そんなに信用がならないか？」

ならない、とは言い切れずに口を閉ざす。実際、アニスの発想に助けられた事も多い。破天荒で型破りな欠点こそあるが、それでも補って余りあるものがアニスにはあるのだ。それを素直に認めるのが癪なのは、普段の行いのせいなのだが。
思わず眉間に力がこもって皺が寄るのを自覚する。眉間を指で揉みほぐしながら深々と溜息を吐く。
「万が一、ユフィが手籠めにされるならば、それはそれで悪くはあるまい」
「グランツ⁉」
「可能性の話だ。それにアニスフィア王女にユフィをつけておく事に意味はある」
「何だと？」
グランツの言葉に一瞬、意図が読み切れずに目を細めてグランツを見てしまう。グランツの視線が私に合い、視線が交わされる。
「事と次第によっては、アルガルド王子には降りて貰わなければならんからな」
「……まさか」
私はグランツの顔を見据えながら呟きを零してしまう。友である彼の考えを想像するのは容易い。しかし、その浮かんだ想像をまさか、と否定してしまうのはそれだけ突拍子もない事だと私には思えたからだ。

驚く私を尻目に、グランツはいつもと変わらない表情のまま、しかし瞳には決然とした光を宿していて。それが何よりもグランツの固い意志を表していた。

「必要であれば私は動くぞ、オルファンス。たとえアニスフィア王女が拒否しようともな」

はっきりと言い切ったグランツの言葉に、私はようやく反応をする事が出来た。それも濃い苦笑交じりのものにはなってしまったが。

グランツが想像している事が実現してしまうような事があれば、あのうつけ者である娘はどんな顔をするだろうか。そんな想像をすれば容易くアニスフィアの反応が思い浮かんだ。

「……あやつは泣いて嫌がるだろうなぁ」

「だからこそ、今のうちに餌を与えおくのだよ。首輪とも言うがな」

「猛獣扱いか」

「むしろ珍獣では？」

「違いない」

あれでも一応、この国の王女ではあるが、その扱いに関しては同意するばかりだ。

肩を竦めて友との会話に応じていると、自然と肩の力が抜けてきた。面倒な話が転がり込んで来てしまったが、この問題を放置する訳にもいかない。事と次第によっては、グランツが想像している未来が実現してしまう事になるのだろう。

それはアニスにとっては望ましくない事なのは想像に難く無い。アルガルドが降りるという事。そしてそれがアニスにとって何を意味するのか。それを想像すれば何とも言えない表情になってしまう。

そんな私の表情を見て、グランツも私が何を思っているのかを察しているだろう。それでもグランツは、私に笑うような口調で告げた。

「――私は見てみたいのだよ。あのアニスフィア王女が〝国王〟になる姿というのをな」

続きは、1月18日発売のファンタジア文庫で！

©Piero Karasu, Yuri Kisaragi 2020